

まさみか ぶんせ わや む ところがなむか
様神の撫宣るす和け向言神惟

われ等の山腰部隊長歓迎の夕

久方振りに日比谷松本樓の集ひ

世界動亂の緊迫下現地戦況の報告に和して
 突如！ 戦鬪的座談展開し緊張と昂奮に湧く……

告報會談座

義方上石

世界を觀衆として支那事變が遂行されて居る時、永らく無氣味に燻つて居た歐洲の火藥庫は興亞奉公の第一日たる九月一日遂に爆發した。獨波の空陸に於ける戰鬪開始は英佛の對獨宣戰布告と共に世界第二次大戰を必至ならしめるに至つた。ヒットラー獨總統が民族の運命を培して「勝利か然らずんば死か」と絶叫してポーランド前進を命令した時全歐制覇のためには英佛の共同戰線も一舉に粉碎するの決意に先立つ外交的示唆があつた、思へば防共樞軸の一翼と成つて東歐依存の相互的聯關に起つた獨逸が突如ソ聯と結んで世界を

驚倒せしめ、煮え切らざりし平沼内閣に爆弾的役割を演ぜしめた烈々火を吐くヒットラーのゼスチユアに再検討の眼を投げるの必要は無いか、最後の武力行使に神武の發動を必要とすること固よりなるも惟神の大道に言向け和する言葉の神秘が解されないのを遺憾とするとは本社評議員陸軍歩兵少佐山腰明將先生の言である。

一昨年事變發生直後應召出征され、支那各地に轉戦し「宣撫の神様」と稱された後備部隊長山腰明將先生の凱旋を歓迎し同先生の戦況報告講演を伺ひ同時に各位の現下非常時局に對する座談的意見の交換會を開催すべしとの同志の熱望に依り本社は去る八日午後五時半より日比谷公園内松本樓に於て山腰部隊長の歓迎會を兼ね座談會を開催し

た。

此の日岩手、青森、秋田、山形と先月来より連続的講演視察行脚の旅に在つた、本社顧問工學博士神原信一郎先生は午後四時半上野驛着と同時に旅の疲れを休める暇も無く會場に臨席された熱心さには一同を讚嘆せしめた、中里社長も青森より急遽歸京（午前十時五十分）此の日の會合を司會するといふ多忙、外には歐洲動亂の危局を報ずる號外屋の鈴の音遠く聞こえ、蟬の鳴く音も絶えてしばし静寂に還る夕涼み時の日比谷原頭、和服姿に威儀を正して山腰部隊長が姿を現はせば定刻違はじと海軍大將山本英輔閣下が端然たる態度で登場する。戰場焦げをした同人加藤好政君が元氣な顔を出す、續いて深町孝之亮氏の入場だ、伯爵上杉憲章閣下が温顔を現すと神道界の長老野尻祐通翁が「御紹介した市毛君はまだ来ませんか」と入つて来る、續いて缺席の筈の宮崎小八郎氏が「是非出席せねばならなくなりまして」と鎌倉より出席する。みそぎの奥澤翁も遙に房州から出かけてくる、目黒羅漢寺の住職安藤妙照尼（お鯉さん）が妹の小久江成さんとお揃ひでお出でになる。思ひ出せば昨年十一月の會合には有髪のお鯉さんとして筆者の側に記念撮影をしたのが最後をそれ以來クリ／＼坊主の妙照尼と變られた姿には定めし華やかにし掛公時代のお鯉さんを知る人をして一掬の涙を注がずには置かなかつたであら

う。次に澁谷の淺原つる子さんが村田保三さんを連れて珍らしくも登場して来た。廣業社の社長石井六期さんに續いて赤木屋の重役大川邦雄氏がニコ／＼と入つて来る斯くて定刻を過ぐる一時間、六十餘名を吸込ませるやうに食堂に案内したときには大分お腹も北山とあつて先づ「腹から」と食事を一緒に済ました。

想像で動く神の進軍には 支那人にも別離の哀しみ

六時四十分中里社長開會を宣すれば山腰部隊長自席より起ち上り此の會合開催に對する謝辭を述べ徐ろに戦練の報告に移る。抑々後備隊元來の使命はと先づ宣撫工作の重要使命を説き、女馬賊の頭目を戦はずして言向け和した實例を引いて杭州、松江に於ける警備、宣撫の工作に腐心した實況をまのあたり見る如く説明し、松江神社の建設に依つて信仰の目標を定め、日本語學校を起して日本の實際常識に關心を持たせ、印刷所を復活させて事變の本質認識に努め、暗黒と化した戦禍の街頭に電氣をつけて支那民衆の利便を圖る等至れり盡くせりの宣撫工作に努力した結果、除州會戰の報に参加部隊と成つた時の如き支那人との間に別れを惜しまれたのには、敵性を失える善良なる支那人に對

し、一刻も早く平和の招來する事を願つた、先頭部隊の後を行く後備隊は糞だらけの戦野を次から次と追ふやうに進軍するのであるが、命令に依る以外は殆んど想像に依つて行動を終始するが、見えざる神の指令にや、後になつて其の経過を見ると大體の方針通りであることに驚かすには居られない。その他自ら斥候として敵前を偵察し、三時間半も虫の息を殺した體驗や、グツシヨリ濡れた儘クリークから這ひ上つて二三分で朝飯を済ました貴い實戦上の苦勞等を極めて自慢に流れないやうにと八分目の遠慮勝ちな報告をして時間の切迫から後日を約して引き下つた。

硬軟兩派の論戦に花が咲く

憂國の至情時に異常あり

充分の時間を見た筈の司會者と會場側の不慣れに多少の喰ひ違ひから座談會の時間を失つたので代表的意見をと思ひ中里長社先づ加藤好政氏に發言を求めらる。

加藤「山腰さんの常勝軍にも似た何の屈托もない戦争を樂々とやつて退けたやうな話に私は反對であります」と先づ若さからくる元氣と實戦に参加して泌々と味つた戦争の苦澁を吐き出すやうに述べ餘後國民の緊張なきを痛罵し、敵前上陸の壯絶、悲絶を語り、平沼内閣退陣の禍根を突

き、阿部内閣に一矢を酬ひ、上層政治階級は、地位の爲めに保身の術に汲々たるは甚だ遺憾である。而も「一將功成りて萬骨枯る」を未だに是認せねばならぬ現狀に不満を持つ者であると所信を吐露して青年日本の有する眞情を訴へる。次に長老代表として野尻祐通翁の御意見を伺ふ。

野尻「山腰さんは宣撫の神様だと聞いて居りましたが今晩親しく其の實狀を伺ひまして成程と感心せずには居られません、只今加藤さんから時局認識に對する國民感情を吐露されましたが、山腰さんの一步超えた（會衆を指導層と見た意味から）御話は千里の差ある如くにして同一の事を論及されたものと私は受取ります、唯今日の爲政者が内閣を投げ出せば一切の責任を解消したりとして、輕井澤に遊び、謡曲を唸り碁を打つ其の心境を疑ふのであります」と言葉の立派なるに引換えて其の無責任さには驚くと痛憤され西歐諸國の重壓を如何に切抜けるかと實際問題を提唱する。

少時沈黙を守つて居た高島晴雄氏指令に依つて起つ、高島「明治六十年の儒佛思想を脱却しなければ先づ日本の眞實の姿に觸れることは出来ない」と冒頭し、知行合一といふが如き陽明の思想に依つて起つたと見られる明治維新の志士の指導精神を以て今日の青少年を指導することは大いなる誤りである。汪兆銘の如き小人物を登場せしめて

抑々東亞新秩序の建設等とは思ひも寄らない。永遠の平和は決して一片の條約に依つて來るものではない。東亞をして日本とし、世界をして日本とせなければいけない。悠久三千年とは何を云ふのであるか、それ以前に日本は無かつたといふのか、そんな思想で政府は何を指導せんとするのだ。天皇を絶對とし、神と崇める吾等の思想に歸一することとなくして日本の將來を世界の將來を修理固成することが出來ると思ふのか、宜しく政府當局はこれに目醒め納得の行くやう御指導が願ひ度いと思ふ……と結ぶ。時計は正に十時を指さんとするので中里社長亦の機會に討議して指導の方向を明示し度いと閉會を宣すれば、タツタ一分で宜しい一言云はして呉れと山下清一氏起つ。

山下「貴方達は忘れて居るものがある否國民全體が忘れて居るものがある。それは切腹することを忘れて居る」と責任なき指導階級に武士道の釘を一本差して十時無事盛會裡に散會しな。